

青年期の親への愛着によるソーシャル・サポート、 サポート希求の差異とそのバランスの検討

— 父親, 母親, 友人に焦点をあてて —

丹 羽 智 美¹⁾

問題と目的

青年期においても親への愛着は重要であり、社会適応に大きな影響を及ぼしていることが明らかとなってきている。そして、その様相は、親との相互作用によって作られる内的作業モデルの質によって異なってくるといわれている (Kenny, 1987; Larose & Boivin, 1998)。

内的作業モデルとは、愛着対象との相互作用を通じて作られる、愛着対象への近接可能性や情緒的応答性等に関する主観的な確信・表象である (遠藤, 1992)。つまり、なんらかの理由で望む場合に愛着対象に近接しえる、また、愛着対象が支援や保護の求めに大体において応じてくれるといった、愛着対象の反応が内的作業モデルに反映されているのである。また同時に、自己は愛着対象から助けを与えられやすい種類の人物であるという、自己のモデルも形成していく。

そして、愛着対象の作業モデルは愛着対象以外へと般化し、他者との対人関係に適用されることが Bowlby (1973) により述べられている。そのため、愛着対象に拒否的なモデルを形成した子どもは、両親だけでなく、他の誰にも望まれない存在であると確信するようになる。反対に、愛着対象に受容的なモデルを形成した子どもは、両親以外の他者にも受容される価値のある存在であると確信し、いかなる時も自分を助けてくれる人物の存在を確信できるようになる (Bowlby, 1973)。つまり、親への愛着によって親以外の他者へのモデルが規定され、それに伴って、他者への期待や対人行動が決まると考えられている。特に青年期になると生活空間が広がり、対人関係が多様になってくる、そのため、親以外の対象にサポートを求めることができる。また、受ける事ができるということは、社会生活に適応する上で重要なことであるといえる。このことから、親への愛着は青年の社会

生活への適応に直接的にだけでなく、親以外の他者を介して間接的にも影響していると考えられる。

そこで、各愛着スタイル¹⁾によるソーシャル・サポートとサポート希求の特徴について Mikulincer & Florian (1998) と Simpson & Rholes (1994) の記述をまとめると以下ようになる。安定型の愛着は、乳幼児期において必要な時に近接でき、自己の状態を知らせるシグナルに敏感に応答してくれる愛着対象との関係から形成される。そのようなことを何度も経験しているので、サポート知覚は高い。そして、助けてくれる他者の存在を疑わないという特徴がある。

対して不安定型の愛着は、乳幼児期において必要な時に近接するのが難しく、シグナルに敏感に応答してくれない愛着対象との関係から形成される。そのため、不安を十分に統制できず、統制感、効力感を得にくい経験をしている。特に、アンビバレント型は、愛着対象による対応の敏感性の無さから、サポート知覚が低い。また、愛着対象の利用可能性の確信の低さから、それを常に確かめようとして、誇張して不安を表現することにより、サポートを求めようとする特徴がある。また、回避型は、必要な時に近接するのが難しく、自己の状態を知らせるシグナルに拒否的に応答する愛着対象との関係から、サポート知覚が低い。また、他者に頼らなくてもいいようにストレス状況を回避するという特徴がある。

実証的には Kobak & Sceery (1988) が親への愛着

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

1) 青年期以降の愛着スタイルをとらえる場合、代表的な3つの類型概念がある。まずは Hazan & Shaver (1987) の愛着スタイルで、安定型、アンビバレント型、回避型と類型する。次に、成人愛着面接による愛着スタイルで、安定型、とらわれ型、愛着軽視型と類型する。両者はそれぞれ順に対応している類型である。しかし、Bartholomew (1990) は回避型と愛着軽視型は異なる類型であるとし、安定型、とらわれ型、愛着軽視型、拒絶不安型と類型している。

の安定型やアンビバレント型の方が回避型よりも家族からのソーシャル・サポートが多いことを明らかにしている。また、Ognibene & Collins (1998) は安定型の方が拒絶不安型よりも友人からのソーシャル・サポートが多いことを示している。そして、親への不安定的な愛着を持っている人の方がサポートネットワークが狭く、サポートに対する満足度も低いことも明らかとなっている (Anders & Tucker, 2000)。

サポート希求について、Simpson, Rholes & Nelligan (1992) は回避型の方がパートナーに求めるサポート希求が低いことを明らかにしている。また、Ognibene & Collins (1998) は安定型やとらわれ型よりも愛着軽視型や拒絶不安型の方がストレス時に他者に求めるサポート希求が高いことを示している。

これらの知見により、他者に対してサポートを求めることができる安定型ととらわれ型は受けているサポートが多いという特徴があると考えられる。特に、とらわれ型の人は過剰にサポートを求める可能性がある。また、愛着軽視型や拒絶不安型は他者にサポートを求められないので、受けるサポートも少なくなるという特徴があると考えられる。

ところが、Kobak & Sceery (1988) 以外は親への愛着を扱った研究ではない。そのため、親への愛着が親だけでなく親以外の対象へ求めるサポートや受けているサポートに対してどのような影響を与えているのかは明確になっていない。また、愛着スタイルごとのソーシャル・サポートとサポート希求両者のバランスについても検討されてきていない。そこで本研究では、重要な他者となりえる父親、母親、最も親しい同性友人に焦点をあてて、各対象からのソーシャル・サポートと各対象へのサポート希求の差異とそのバランスの特徴について愛着スタイルごとに明らかにすることを目的とする。

方法

調査協力者：321名 (男子184名 女子137名)

調査時期：2002年12月上旬

調査内容：親への愛着尺度：丹羽 (2002a) によって作成された、愛着回避8項目、愛着不安9項目を使用した。5件法。

親への愛着尺度は Bartholomew (1990) の概念に沿って、愛着対象を親に焦点付けて作成されている。Brennan, Clark & Shaver (1998) も同様に、愛着対象をパートナーに焦点づけ、Bartholomew (1990) の概念に沿って尺度化を行っている。その上で、愛着回避と愛着不安の得点の高低群により Bartholomew (1990) の愛着スタイルをとらえることができるとして

いる。つまり、愛着回避も愛着不安も低い安定型 (secure)、愛着不安が高く、愛着回避が低いとらわれ型 (preoccupied)、愛着回避が高く、愛着不安が低い愛着軽視型 (dismissing)、愛着回避も愛着不安も高い拒絶不安型 (fearful) となる。そこで本研究においても Brennan et al. (1998) と同様の方法で類型化を行い、検討を行うこととする。

以下の尺度については、父親、母親、最も仲のよい同性友人について回答を求めた。

ソーシャル・サポート尺度：福岡・橋本 (1997) によるソーシャル・サポート尺度より、情緒的サポートに関する6項目を使用した。4件法。

サポート希求尺度：福岡・橋本 (1997) によるソーシャル・サポート尺度の情緒的サポートに関する6項目を、語尾を“～してほしい”と変更して使用した。4件法。

結果

1. 親への愛着と各対象からのソーシャル・サポート、各対象へのサポート希求との関連

親への愛着と父親、母親、友人からのソーシャル・サポート、父親、母親、友人へのサポート希求との関係を見るために、相関係数を算出した結果が Table 1 である。その結果、愛着回避は父親、母親、友人からのソーシャル・サポートと ($r = -.29, p < .001$; $r = -.56, p < .001$; $r = -.19, p < .001$), また、父親、母親、友人へのサポート希求 ($r = -.37, p < .001$; $r = -.57, p < .001$; $r = -.22, p < .001$) との間に有意な負の相関が得られた。また、愛着不安は父親、母親、友人からのソーシャル・サポートとの間に有意な負の相関が ($r = -.15, p < .01$; $r = -.31, p < .001$; $r = -.19, p < .001$), 母親、友人へのサポート希求との間に有意な負の相関 ($r = -.16, p < .01$; $r = -.12, p < .05$) が得られた。以上のことから、愛着回避と愛着不安は、父親、母親だけでなく、友人からのソーシャル・サポート、サポート希求とも関係があることが示された。次に愛着スタイルに

Table 1 親への愛着と各対象からのソーシャル・サポート、各対象へのサポート希求との関係

	愛着回避	愛着不安
父親ソーシャル・サポート	-0.29***	-0.15**
父親サポート希求	-0.37***	-0.05
母親ソーシャル・サポート	-0.56***	-0.31***
母親サポート希求	-0.57***	-0.16**
友人ソーシャル・サポート	-0.19***	-0.19***
友人サポート希求	-0.22***	-0.12

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 2 各対象へのソーシャル・サポートとサポート希求に対する分散分析結果

	安定型(99名) (平均値(SD))	とらわれ型(67名) (平均値(SD))	愛着軽視型(53名) (平均値(SD))	拒絶不安型(102名) (平均値(SD))	主効果(F値)
父親ソーシャル・サポート	15.32(4.57)	13.15(3.86)	12.21(4.31)	12.66(3.98)	9.41*** 1>2, 3, 4
父親サポート希求	14.84(4.00)	14.99(4.38)	11.57(4.58)	12.82(3.87)	1.08*** 1, 2>3, 4
母親ソーシャル・サポート	18.36(3.95)	17.34(3.25)	15.32(4.53)	14.24(3.65)	27.22*** 1, 2>3, 4
母親サポート希求	17.54(4.33)	17.55(3.60)	14.15(4.99)	14.04(3.78)	20.16*** 1, 2>3, 4
友人ソーシャル・サポート	19.79(3.66)	19.13(3.10)	19.28(4.05)	17.87(3.61)	5.03** 1>4
友人サポート希求	20.26(3.67)	19.85(3.57)	19.72(4.16)	18.42(4.08)	4.16** 1>4

p<.01 *p<.001 (1:安定型, 2:とらわれ型, 3:愛着軽視型, 4:拒絶不安型)

おける父親、母親、友人からのソーシャル・サポート、父親、母親、友人へのサポート希求の差異を検討するため、愛着スタイルによる分散分析を行った。

2. 親への愛着による各対象からのソーシャル・サポート、各対象へのサポート希求の差異

父親、母親、友人からのソーシャル・サポートについて愛着スタイルによる分散分析を行った (Table 2)。その結果、3者とも主効果がみられた (F(3,317) = 9.41, p<.001; F(3,317) = 27.22, p<.001; F(3,317) = 5.03, p<.01)。多重比較を行った結果、父親からは安定型の方がとらわれ型、愛着軽視型、拒絶不安型よりも多くのソーシャル・サポートを受けていた。母親からは安定型ととらわれ型の方が愛着軽視型と拒絶不安型よりも多くのソーシャル・サポートを受けていた。友人からは安定型の方が拒絶不安型よりも多くのソーシャル・サポートを受けていた。

次に、父親、母親、友人へのサポート希求について愛着スタイルによる分散分析を行った (Table 2)。その結果、3者とも主効果がみられた (F(3,317) = 10.84, p<.001; F(3,317) = 20.16, p<.001; F(3,317) = 4.16, p<.01)。多重比較を行った結果、父親と母親へは安定型ととらわれ型の方が愛着軽視型と拒絶不安型よりも多くのサポート希求がみられた。友人へは安定型の方が拒絶不安型よりも多くのサポート希求がみられた。これらの結果から、父親、母親だけでなく、友人からのソーシャル・サポート、友人へのサポート希求にも愛着スタイルによって差が見られることが明らかとなった。

3. 親への愛着による各対象からのソーシャル・サポート、各対象へのサポート希求のバランス

まず、ソーシャル・サポート得点からサポート希求得点を引き、その数値がマイナスになる、すなわちサポート希求の方が高い群と、プラスになる、すなわち受けているソーシャル・サポートの方が高い群に分類した。そして、ソーシャル・サポートとサポート希求のバランス

Table 3 愛着スタイルによる父親からのソーシャル・サポートと父親へのサポート希求のバランス

	サポート欲求 が高い (人数(%))	ソーシャル・サ ポートが高い (人数(%))	計(人数)
安定型	30(40.00)	45(60.00)	75
とらわれ型	37(62.71)	22(37.29)	59
愛着軽視型	12(30.77)	27(69.23)	39
拒絶不安型	45(52.33)	41(47.67)	86
計(人数)	124	135	259

Table 4 愛着スタイルによる母親からのソーシャル・サポートと母親へのサポート希求のバランス

	サポート欲求 が高い (人数(%))	ソーシャル・サ ポートが高い (人数(%))	計(人数)
安定型	25(35.71)	45(64.29)	70
とらわれ型	34(68.00)	16(32.00)	50
愛着軽視型	11(29.73)	26(70.27)	37
拒絶不安型	27(43.55)	35(56.45)	62
計(人数)	97	122	219

について愛着スタイルによる差異をみるために、 χ^2 分析を行った (Table 3, 4)。ソーシャル・サポート得点からサポート希求得点を引いた結果、0 になった場合は分析から外している。

その結果、愛着スタイルにおける、ソーシャル・サポートとサポート希求のバランスには、父親と母親で人数の偏りが有意であった ($\chi^2(3)=12.32, p<.01$; $\chi^2(3)=16.67, p<.01$)。残差分析の結果、安定型においては母親へのサポート希求の方がソーシャル・サポートより強い人が少なく、母親からのソーシャル・サポートの方がサポート希求より高い人が多い傾向にあった。とらわれ型においては父親と母親へのサポート希求の方がソーシャル・サポートより強い人が多く、父親と母親からのソーシャル・サポートの方がサポート希求より高い人が少なかった。また、愛着軽視型においては、父親へのサポート希求の方がソーシャル・サポートより強い人が少なく、父親からのソーシャル・サポートの方がサポート希求より高い人が多かった。母親へも同様に、母親へのサポート希求の方がソーシャル・サポートより強い人が少なく、母親からのソーシャル・サポートの方がサポート希求より高い人が多い傾向がみられた。しかし、友人には愛着スタイル間における人数の偏りはみられなかった。

考 察

本研究は各愛着スタイルによるソーシャル・サポートとサポート希求の特徴とそのバランスについて検討することを目的とした。その結果、安定型は父親へも母親へもサポート希求が強く、受けているソーシャル・サポートも高い。また、母親から受けているソーシャル・サポートの方がサポート希求より高い傾向にあったが、父親にはそのような偏りがみられなかった。Mikulincer & Florian (1998) と Simpson & Rholes (1994) によれば、安定型は愛着対象が自己の状態を知らせるシグナルに敏感に反応してくれるという経験をしてくれているので、ストレス状況に直面しても助けてくれる他者の存在を疑わないという特徴がある。つまり、父親へも母親へも容易にサポートを求められると考えているため、2者へのサポート希求が強く、また、受けているソーシャル・サポートも高いと考えられる。そして、両者のバランスについて、母親からのソーシャル・サポートの方がサポート希求より高い傾向にあり、父親にはそのような結果はみられなかった。それは、母親との方が日常生活で接点が多く、サポートを受けることが多いため、そのような傾向が結果に現れたのであろう。

とらわれ型は父親へのサポート希求は強く、受けてい

るソーシャル・サポートは低い。母親へはサポート希求も受けているソーシャル・サポートも高いが、サポート希求の方が強いという結果が出た。Mikulincer & Florian (1998) と Simpson & Rholes (1994) によれば、アンビバレント型は愛着対象による対応の敏感性の無さから、サポート知覚が低い。また、愛着対象に対する利用可能性の確信の低さから、それを常に確かめる必要があるため、誇張して不安を表現することにより、サポートを求めようとする特徴がある。つまり、常に十分なサポートを得られているわけではないため、欲求の方が強く出たのだと考えられる。これはとらわれ型の特徴を示した結果と思われる。

愛着軽視型は父親へも母親へもサポート希求が低く、受けているソーシャル・サポートも低い。また、父親から受けているソーシャル・サポートの方がサポート希求より高く、母親にも同様の傾向があった。Mikulincer & Florian (1998) と Simpson & Rholes (1994) によれば、回避型は、自己の状態を知らせるシグナルに拒否的に応答する愛着対象との関係から、他者に頼らなくてもいいようにストレス状況を回避する特徴がある。そのため、父親へも母親へもサポート希求が低く、受けているソーシャル・サポートも低い。サポート希求を強く否定するため、受けているソーシャル・サポートの方が高い結果が出たのだと思われる。比較的愛着軽視型の特徴を示した結果と思われる。

拒絶不安型は父親へも母親へもサポート希求が低く、受けているソーシャル・サポートも低い。しかし、両者のバランスには何の特徴もみられなかった。Bartholomew & Horowitz (1991) は、愛着軽視型について、傷つけられるのが怖いので、他者を信用したり、頼ったりすることが難しいという特徴があると記述している。つまり、他者を信用していないために他者に助けてほしいと思うことが少なく、そのため、受けるサポートも少なくなると思われる。そのため、ソーシャル・サポートやサポート希求への偏りがなかったのだろう。

友人に対しては安定型の方が拒絶不安型よりもサポート希求やソーシャル・サポートが高かった。これは Ognibene & Collins (1998) の結果と同様である。一方、愛着スタイル間において両者への偏りの差異はみられなかった。金政 (2003) により、文脈や関係性の変動によりモデルが変化する可能性があるということが示唆されているように、友人との親密性によって、親とは異なった友人に特有のモデルを形成している可能性もある。また、丹羽 (2002b) では、愛着軽視型の人でも親密な友人に対しては良好な関係を築いている可能性があるという結果もみられている。そのため、父親や母親からの

ソーシャル・サポートと父親や母親へのサポート希求のバランスにおいて愛着スタイルの特徴を示した愛着軽視型やとらわれ型でも、親密な友人に対しては親とは異なったバランスでサポート希求を向け、ソーシャル・サポートを受けているのかもしれない。このことから、友人関係を検討する場合、今後は親密性を統制した上で、愛着スタイル間の差を詳細にみる必要があると思われる。本研究では親密性を統制してはいないが、それにもかかわらずソーシャル・サポートとサポート希求において類型間に差異がみられたことから、親に向ける場合とそのバランスが異なるだけで、友人に向ける場合においても、親への愛着から受ける影響は少なくないと考えられる。

以上より、各愛着スタイルにおけるソーシャル・サポートとサポート希求に、父親や母親に対してだけでなく、友人に対しても類型の特徴があることが示された。また、愛着スタイルにより、父親と母親へのサポート希求と受けるソーシャル・サポートのバランスは類型の特徴を示した結果となったが、友人に関しては関係性の変化によって友人のモデルが変化する可能性があるため、類型間によるソーシャル・サポートとサポート希求の偏りの差異はみられなかった。今後は愛着によるサポート資源の広さ、多様さとそれによるストレス状況での対処行動の適切さとの関連を検討することが望まれる。

引用文献

- Anders, S. L. & Tucker, J. S. 2000 Adult Attachment Style, Interpersonal Communication Competence, and Social Support. *Personal Relationships*, 7, 379-389.
- Bartholomew, K. 1990 Avoidance of Intimacy: An Attachment Perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. 1991 Attachment Style Among Young Adults: A Test of a Four-Category Model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol.2: Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1977 母子関係の理論Ⅱ: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., Clark, C.L. & Shaver, P.R. 1998 Self-Report Measurement of Adult Attachment: An Integrative Overview. In Simpson, J. A. & Rholes, W.S. (eds.) *Attachment Theory and Close Relationships* (Pp.46-76). New York: Guilford.
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象—愛着研究の最近の動向: 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観— *心理学評論*, 35, 201-233.
- 福岡欣治・橋本 幸 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 *心理学研究*, 68, 403-409.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. 1987 Romantic Love Conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 金祐祐司 2003 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望 対人社会心理学研究, 3, 73-84.
- Kenny, M.E. 1987 The Extent and Function of Parental Attachment Among First-Year College Students. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 17-29.
- Kobak, R.R. & Sceery, A. 1988 Attachment in Late Adolescence: Working Models, Affect Regulation, and Representations of Self and Others. *Child Development*, 59, 135-146.
- Larose, S. & Boivin, M. 1998 Attachment to Parents, Social Support Expectations, and Socioemotional Adjustment during the High School-College Transition. *Journal of Research on Adolescence*, 8, 1-27.
- Mikulincer, M. & Florian, V. 1998 The Relationship between Adult Attachment Styles and Emotional and Cognitive Reactions to Stressful Events. In Simpson, J.A. & Rholes, W.S. (eds.) *Attachment Theory and Close Relationships* (Pp.143-165). New York: Guilford.
- 丹羽智美 2002a 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 名古屋大学大学院教育発達科学研究科修士論文(未公開)
- 丹羽智美 2002b 青年期における親への愛着が友人関係に及ぼす影響—環境移行期に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 49, 135-143.
- Ognibene, T.C. & Collins, N.L. 1998 Adult Attachment Styles, Perceived Social Support and Coping Strategies. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15, 323-345.
- Simpson, J. A. & Rholes, W.S. 1994 Stress and Secure Base Relationships in Adulthood. In

Bartholomew, K. & Perman, D. (eds.) *Advances in Personal Relationships* (Vol.5, Pp. 181-204). London : Jessica Kingsley.
Simpson, J. A., Rholes, W.S. & Nelligan, J.S.
1992 Support Seeking and Support Giving

within Couples in an Anxiety-Provoking Situation: The Role of Attachment Styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434-446.

(2003年9月30日 受稿)

ABSTRACT

The Effects of Attachment to Parents on Social Support and Support Seeking, and on the Balance between Them

Tomomi NIWA

The aims of this study were to examine the effects of attachment to parents on support seeking from significant others, as well as the social support actually received from these significant others, and also, to examine the balance between received support and support seeking. The main results were as follows. Participants who were identified to be of the Secure Type received much social support from their fathers and mothers, and also sought for much support from the two. They also revealed a tendency receive more support from their mother than what they sought from her. Participants who were characteristic of the Preoccupied Type received and sought a lot of support from their mothers, receiving little from their fathers, while demanding a lot from them. They also showed a tendency to seek more support from their fathers and mothers than they received. Those who were a Dismissing Type received little support from their father and mother, while also seeking little. They typically sought less support from their fathers and mothers than what they received from them. Finally, the Apprehensive Type reported little support from their father and mother, while seeking little support from them. They showed no imbalance between support received nor sought from their father and mother. Incidentally, the Secure Type received more social support from their friends, and sought more from them than the Apprehensive Type. However, there were no differences between attachment styles on the imbalance of social support received and sought.

Key words: attachment to parents, attachment styles, social support, support seeking